



TITLE:

米穀を通じて見たる朝鮮と内地との関係

AUTHOR(S):

八木, 芳之助

CITATION:

八木, 芳之助. 米穀を通じて見たる朝鮮と内地との関係. 經濟論叢 1931, 33(3): 372-392

ISSUE DATE:

1931-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130078>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 三 第

卷三十三第

行發日一月九年六和昭

論 叢

家屋税の累進 法學博士 神戸 正雄
長期波動について 文學博士 高田 保馬

時 論

恩給の改革 法學博士 神戸 正雄

研 究

米穀を通じて見たる朝鮮と内地との關係 經濟學士 八木芳之助
一般的均衡體系と交換方程式 經濟學士 柴田 敬
信用擴張と銀行流動性 經濟學士 中谷 實
農家における米の販賣 經濟學士 谷口 吉彦

說 苑

近江商人と地方金融 經濟學士 菅野和太郎
パースンスの『景氣豫測』 經濟學士 桑原 晋
最近の獨逸財政 經濟學士 大谷 政敬
植民地鐵道政策の意義について 經濟學士 金持 一郎

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

研 究

米穀を通じて見たる朝鮮と内地との關係

八 木 芳 之 助

目 次

- (一)數量上より見たる朝鮮米と内地米、(二)價格上より見たる朝鮮米と内地米、(三)生産關係より見たる朝鮮米と内地米、(四)結言

一

昨年の如き天候に恵まれたる大豊作は稀有にして、今後毎年繰返さるるものとは考へられないから、本邦に於て米の不足を憂ふる必要が全然消滅したとは云へない。何人も將來に於て再び收量不足に就て問題とすべき時の來らざるものなることを斷言し得ないであらう。蓋し昨年の内地米豊作を以てするも、尙ほ内地消費に及ばざるものにして、本年度の過剰米は、一に朝鮮、臺灣就中前者の産米が内地へ多量に移入せられし結果である。而して之は兩地に於ける産米増殖策に基くものであり、然かも臺鮮米の移入に對しては、之を外米並に取扱ひ得ざる所に米穀政策の困難がある。内地の米生産者は、生産費低廉なる鮮米の進出によつて惱されつつある。併し乍ら内

地米のみを以てして、内地需要を充し得ざる限り、鮮米の移入は必要であり、殊に内地の米收穫が平年作又はそれ以下の場合に於ては、殊に然りである。如斯鮮米は内地に移入されざるを得ず然かも此の移入は内地米價を壓迫することによつて、内地生産者を損ふものとされてゐる。實に鮮米の移入は我が米穀問題に大なる波紋を投ずるものであり、然かも同時に我が食糧問題解決の鍵を握るものと云はなければならぬ。私は以下米穀を通じて内地と朝鮮とが如何なる關係にあるかを、數量、價格、生産關係の三方面より検討しやうと思ふ。

二

最近約十五年間の大勢を見るに、内地の米消費量は年々約九十萬石の割合を以て増加しつつあるに對し、内地の米産額は豐凶を平均して毎年五十萬石を増すに過ぎず、差引四十萬石の不足が毎年累積してゆく。これは鮮米の平均移入増加量約三十萬石、臺米のそのの十萬石を以て補充され、ために外米輸入量を特に増加することなくして、近年は略之を停頓せしむるを得るに至つた。此の點より考ふれば、臺鮮産米の増加趨勢は永き將來を虞るとき、之を呪ふべきでなく、又阻止すべきではなからう。

併し乍ら鮮米が年々五百數十萬石づつ移入さるるにより、之に由て内地に於ける米の供給量を増し、爲めに内地米價を量的に壓迫するものと考へられてゐる。併し鮮米移入が内地米價を壓迫する程度如何は、(一)鮮米が一年の如何なる季節に多く移入さるるか。(二)鮮米移入は内地米の收穫豐凶の如何に拘らず行はるるや否やにも懸つてゐる。

先づ第一の點を吟味するため、大正十年一月より昭和五年十二月に至る期間に於ける、朝鮮より内地への各月の米移入高に就て、季節的變動指數を求め、之を同期間に於ける内地米の管外移出高の夫に比較すれば、左の如くである。²⁾

第一表 朝鮮内地移入米及び内地産米管外移出高の季節的變動指數

月	朝鮮米	内地米
10	57.4	112.5
11	137.9	131.6
12	210.2	159.6
1	146.3	125.0
2	116.7	84.7
3	120.0	91.8
4	110.7	89.1
5	86.5	88.9
6	77.8	82.3
7	51.6	75.5
8	42.5	72.6
9	42.4	86.4
平均	100.0	100.0

之によれば朝鮮より内地への移入米は、收穫直後の十一月より翌年三月迄、就中收穫直後の三ヶ月間に最も多く移入される。これ貧弱なる朝鮮農家が收穫直後、米價の如何に

拘らず生産米を賣り放つ事情による。此の點は多く論ぜらるる所にして、昭和五年一月の米穀調査委員會の答申中にも、『内地に移出する朝鮮米の數量を月別平均的に調節するため、速に朝鮮總督府に於て適當なる方策を樹立すべきものとす』と謳はれてゐる所以である。目下朝鮮總督府に於ては、先づ第一期計畫として五ヶ年間に、移出最出盛期に於ける過剰米數量、約百萬石を保管するに足る倉庫を設置せんとしつつあるを以て、之が實現後に於ては、現在の狀態は多少改善さるる所があらう。

第二に鮮米の移入は如何なる年に多く行はるるか。我々は先づ内地と朝鮮の米收穫の豊凶が年々如何なる關係にあるやを窺ふを要する。⁴⁾

- 2) 季節的變動指數の算出は Persons の Link relatives の方法による。拙稿、産米の管外移出高の季節的變動(本誌第33卷2號參照)。
 3) 東浦庄治氏、鮮米の統制と朝鮮の農民(帝國農會報、第19卷11號)參照。
 4) (イ)朝鮮米收穫高の關係的偏差は、先づ最小自乗法によつて大正1年乃至昭和5年の期間に當てたる對數直線 $\log = y \ 1.1532638 + 0.0062202x$ により。

第二表 朝鮮及び内地收穫高の豊凶

年次	朝鮮收穫高 <small>百萬石</small>	右の關係的偏差	豊凶	内地收穫高 <small>百萬石</small>	右の關係的偏差	豊凶
大正 4	12.84	- 1.7	平	55.92	2.2	平
5	13.93	5.1	上	58.45	5.6	上
6	13.68	1.8	平	54.56	- 2.5	平
7	15.29	12.2	豊	54.70	- 3.3	平
8	12.70	- 8.2	下	60.81	6.6	上
9	14.88	6.1	上	63.20	9.8	上
10	14.32	0.6	平	55.18	- 4.8	下
11	15.01	3.9	平	60.69	4.0	平
12	15.17	3.5	平	55.44	- 5.6	下
13	13.21	-11.0	凶	57.17	- 3.1	平
14	14.77	- 2.0	平	59.70	0.8	平
15	15.30	0.1	平	55.59	- 6.4	下
昭和 2	17.29	11.5	豊	62.10	4.3	上
3	13.51	-14.1	凶	60.30	1.2	平
4	13.70	-14.2	凶	59.55	- 0.1	平
5	19.18	(18.2)	豊	66.88	(12.2)	豊

の存するを見ない。従て昭和五年度の如く、兩地とも大豊作たりしことは稀であつた。然し兩地の豊凶が常に相反し、有無相通するに好都合なる關係にあるものとも斷じ得ない。

然らば朝鮮より内地への移入米は、兩地の豊凶と如何なる關係に立つか。

第二表及び第三表よりして、大正五年乃至昭和五年の十五ヶ年間に於て、朝鮮よりの内地移入高と朝鮮産米の豊凶との間に於ける相關々係の有無を検討すれば、(+・五四九の順の相關々係の存するを知る。即ち朝鮮の豊年には内地への移入米が増す傾向にある。蓋し當然であらう。次に内地

右によるときは過去十六ヶ年中、兩地の豊凶は大正八年、昭和三、四年を除いて大體に一致するも併し完全には一致しない。試みに兩者の關係的偏差より、大正四年乃至昭和四年の期間に於て、相關係數を求むるに(+・〇・七一にして、兩者の間には何等の積極的關係

各年の正常値を求めて之を(2)とし、原數値を(1)として $\frac{(1)}{(2)} - 100\%$ の式により算出す。内地米收穫高の關係的偏差も同様にして、明治32年乃至昭和4年の期間に當てめたる對數二次拋物線 $\log y = 1.7322750 + 0.0058099x - 0.0001956x^2$ より算出する。

(ロ) 平年作より1割以上增收を豊作、4分1厘乃至9分9厘迄の增收を上作、平年作

第三表 朝鮮より内地への移入高と其の關係的偏差

年次	朝鮮より内地への移入米高	右の關係的偏差
大正 5	十萬石 14.31	- 1.3
6	11.90	-28.7
7	15.79	-17.3
8	27.66	27.1
9	16.90	-31.5
10	28.44	2.2
11	32.36	3.6
12	34.04	- 2.4
13	44.82	15.7
14	44.21	3.2
15	52.03	10.4
昭和 2	58.24	13.0
3	70.38	25.4
4	53.86	-11.4
5	52.19	-20.4

て微弱ながらも増加する傾向にあるのであつて、之は後に述ぶる如く朝鮮に於ては、商品化する米量中、地主の占むる割合が内地より遙に多きため、内地凶作にして米價高の年には勢ひ内地への移入量を増すものと考へられる。

然らば最後に朝鮮移入米量と内地米價との間に如何なる關係が存するか。⁶⁾

第四表 深川正米相場の關係的偏差

年次	深川正米相場	右のDeflated price	關係的偏差
大正 5	13.02	9.51	-29.6
6	17.71	10.19	-25.1
7	28.29	12.45	- 9.1
8	43.32	15.74	14.0
9	49.73	14.31	3.0
10	29.00	11.45	-18.2
11	37.52	14.74	4.6
12	31.33	12.83	- 9.6
13	36.99	14.40	0.8
14	41.81	16.15	12.2
15	38.97	16.70	15.2
昭和 2	36.14	17.10	17.1
3	31.74	15.14	2.9
4	29.13	13.84	- 6.5
5	28.34	15.95	7.0

第三表と第四表よりして兩者の間には(+・四三八の正の相關々係の存するを知る。之によつて我々は内地米價の高き年には、微弱ながらも朝鮮よりの移入米が増加する傾

米の豐凶と朝鮮よりの移入米との間には、(一〇・三二九の微弱ながらも逆の相關々係の存するを知る。即ち内地の凶作にして米價高の年には、鮮米の移入が極め

より4分以内の増減收を平作、4分1厘乃至9分9厘迄の減收を下作、1割以上の減收を凶作とする。

- 5) 朝鮮よりの内地への移入米量は昭和6年度、米穀要覽による。此の移入量は10月より9月迄を1ヶ年とする年度平均である。朝鮮よりの移入米量に就ては大正4年乃至昭和5年の期間に當條めたる對數二次拋物線 $\log y = 1.5188264 + 0.0239505x - 0.0002734x^2$ より關係的偏差を算出す。

向にあるを知る。これ朝鮮米は内地米の代用品として米價高の年には、より多く消費さるるに基く現象であらう。

かく觀じ來たるときは、朝鮮と内地との豐凶が相反し、兩地間の需給が自然に調節さるるやう兩地の自然的事情が好都合になれるものと云ふを得ない。茲に於てか季節的にも、豐凶の如何によつても、兩地間に於ける米穀の移動に統制を加ふべき必要が生じ來たるものである。

三

往時朝鮮米は赤米、稗、石等の混入せる粗惡米であつたが、品質改良の努力により、近年品質大いに改善され、優良品の作付反別は昭和四年度に於て一一六萬町歩を超え、水稻作付總面積の七割三分を占むるに至つた。かかる品質改良により、内地米との値鞘は年々縮少しつつある。鮮

第五表 大阪正米と朝鮮米との値鞘(單位圓)

年次	攝津赤三 (1)	釜山米三 (2)	米値 (3)	右比率 (3)÷(2) =(4)
明治43	12.66	11.05	1.61	14.6%
44	17.47	14.96	2.51	16.8
大正1	20.57	17.06	3.51	20.6
2	21.66	18.17	3.49	19.2
3	15.96	12.96	3.00	23.1
4	12.90	10.06	1.28	12.7
5	13.91	11.72	2.19	18.7
6	19.17	17.67	1.50	8.5
7	28.84	27.15	1.69	6.2
8	46.24	42.38	3.86	9.1
9	45.29	40.52	4.77	11.8
10	31.21	26.87	4.34	16.2
11	36.59	31.64	4.95	15.6
12	32.92	29.36	3.56	12.1
13	39.73	35.35	4.38	12.4
14	42.42	39.20	3.22	8.2
15	39.05	35.53	3.52	9.9
昭和2	36.96	32.09	4.87	15.2
3	30.80	27.83	2.97	10.7
4	30.55	27.60	2.95	10.7
5	26.40	24.49	1.91	7.8
6	18.80	16.32	2.48	15.2

- 6) 深川正米相場は10月—9月を1ヶ年とする年度の平均米價もとる。之を Deflate するためとれる日銀物價指數は、之を前年基準の幾何平均に換算せるものである、又關係的偏差は明治34年—昭和5年の期間に當りたる對數直線 $\log y = 1.1304955 + 0.0030804x$ より算出す。拙稿、收穫高と米價との關係(經濟論叢第33卷1號參照)
- 7) 朝鮮總督府殖産局、朝鮮の米(昭和5年3月), p. 13.
- 8) 攝津赤三等及び釜山米三等相場は何れも曆年度平均をとる。兩者とも昭和2年迄

米の最大消費地たる大阪市に於ける釜山三等米と攝津三等米との値鞘、竝に其の比率を示せば第五表の如くである。⁸⁾

右に由れば、(一)兩相場の値鞘比率は大體に於て年々縮少しつつあるを知る。(二)それは殊に米價騰貴の年(大正七、八、九、十四年)に於て、非常に縮少するを知るのである。これ内地米に對し鮮米の代替的消費移轉が自由に行はる結果であつて、此の點に於て鮮米は外米と全く異つた關係に立つてゐる。⁹⁾

かくの如く鮮米と内地米との間には、代替的消費移轉が自由に行はるるため、内地米穀市場に入込む鮮米の價格は、内地米價に引きつけられ、朝鮮に於ける米の費用價格より若干離脱するものと考へられる。此の關係を一層明瞭ならしむるため、大阪正米相場、大阪に於ける鮮米相場、朝鮮に於ける玄米及び粳相場の間に、夫々如何なる關係が存するかを吟味せなければならぬ。茲に粳相場をも選びたる所以は、朝鮮農家(地主も然り)は生産米を粳にて販賣するが故に、農家の利害關係は粳相場の如何に依存するからである。仍て鮮米と最も關係深き内地米穀市場たる大阪正米市場の相場をとり、朝鮮の玄米及び粳の代表的相場としては、釜山、大邱、木浦の玄米及び大邱、木浦の粳相場を選び、(1)此等各相場相互間に第六表記載の九種の相關々係を求め、(2)且つ此等の相關せしめたる各組の相場に就て、何れが後れて追隨するかの前後關係を知るため、各相場を一ヶ月づつ後らして、統計學上の時の速さ(Lead)と時の後れ(Lag)とを吟味した。

期間は(イ)大阪正米と釜山玄米相場とに就ては、大正十年一月より昭和五年十二月に至る一二〇

は農林省、米穀統計及び米穀年報の數字による。昭和3年以後は大阪堂島米穀取引所月報による。但し昭和3年以降の大阪に於ける釜山米相場としては、米穀時報の穀良拔三等をとる。大正7年度に限り兩者とも1月乃至8月の8ヶ月の平均である。それは米騒動により大阪正米相場の9月以降を缺くからである。昭和6年度は1月乃至6月の6ヶ月平均である。

9) 河田博士、穀價の研究、p. 69 以下參照。* 費用價格とは生産費によつて決定さ

ヶ月をとる。(ロ)大邱及び木浦の玄米及び粳相場に就ては、大正十年一月より昭和四年十二月迄の一〇八ヶ月をとりたるは、昭和五年度の數字を求め得ざりしによる。之と相關せしめたる大阪正米相場は勿論同一期間をとつた。¹⁰⁾

かくして此等各月の平均相場を原數として、之より十二ヶ月の移動平均を求め、この移動平均値を基準とする原數の關係的偏差に就て、各組の間に存する相關係數を算出したのである。¹¹⁾

第六表 大阪正米、朝鮮玄米及び粳相場の相關係數

米穀を通じて見たる朝鮮と内地との關係

第三十三卷

三七九

第三號

六三

大阪正米相場と大釜山玄米相場との關係係數	大阪正米相場を一ヶ月	0.5369
	大後同釜山玄米相場を一ヶ月	0.8848
	大後同釜山玄米相場を一ヶ月	0.7540
釜山玄米相場と大阪正米相場との關係係數	大阪正米相場を一ヶ月	0.6206
	大後同釜山玄米相場を一ヶ月	0.9091
	大後同釜山玄米相場を一ヶ月	0.6950
大阪正米相場と大釜山玄米相場との關係係數	大阪正米相場を一ヶ月	0.5221
	大後同釜山玄米相場を一ヶ月	0.8690
	大後同釜山玄米相場を一ヶ月	0.7742
大邱玄米相場と大釜山玄米相場との關係係數	大邱玄米相場を一ヶ月	0.3408
	大後同釜山玄米相場を一ヶ月	0.5770
	大後同釜山玄米相場を一ヶ月	0.3798
大阪正米相場と大釜山玄米相場との關係係數	大阪正米相場を一ヶ月	0.4493
	大後同釜山玄米相場を一ヶ月	0.8776
	大後同釜山玄米相場を一ヶ月	0.8208
大阪正米相場と大釜山玄米相場との關係係數	大阪正米相場を一ヶ月	0.2629
	大後同釜山玄米相場を一ヶ月	0.4912
	大後同釜山玄米相場を一ヶ月	0.4686
木浦玄米相場と大釜山玄米相場との關係係數	木浦玄米相場を一ヶ月	0.3835
	大後同釜山玄米相場を一ヶ月	0.7659
	大後同釜山玄米相場を一ヶ月	0.7725
木浦玄米相場と大阪正米相場との關係係數	大阪正米相場を一ヶ月	0.5813
	大後同釜山玄米相場を一ヶ月	0.8539
	大後同釜山玄米相場を一ヶ月	0.7028
木浦玄米相場と大阪正米相場との關係係數	大阪正米相場を一ヶ月	0.2685
	大後同釜山玄米相場を一ヶ月	0.6411
	大後同釜山玄米相場を一ヶ月	0.7302

るべき筈の價格を意味する。
 10) 大阪正米相場としては攝津赤三等をとる。資料は脚註(8)に同じ。釜山玄米の產地及び大阪相場は昭和2年12月迄は農林省の米穀年報記載の釜山三等米相場をとり、3年1月以降は米穀時報記載の穀良拔三等相場をとる。大邱並に木浦の玄米及び粳相場は朝鮮總督府統計年報及び前掲『朝鮮の米』附録第13, 14表記載の中等品の1石相場をとる。

右の二十七組の相關々係よりして次の如く結論される。(1)大阪正米相場と朝鮮玄米相場との間には、極めて密接なる正の相關々係の存するを知る。最高の係數は大阪正米と大阪に於ける釜山玄米との〇・八八四八であり、最低にても大阪正米と木浦に於ける朝鮮玄米との〇・八五三九である。而して兩者の關係に於ては常に同月の相關係數が最大である。併し同月に於て係數の最大なることは、全く前後關係の存せざることを意味するものでなく、寧ろ今日の如き交通、通信機關の完備せる時代に於ては、先行及び追隨の關係は一ヶ月よりも遙に短き期間に行はるるものと考へられる。之を實證するためには、日々の相場を比較すべきであるが、此の資料を得ることは朝鮮各地の玄米相場について困難であるから、茲では大阪正米相場と朝鮮玄米相場とを交互に一ヶ月づつ後らせて、何れの場合に兩者の相關係數がより大であるかを知ることにより、兩者の前後關係を吟味することとした。由之鮮米を一ヶ月後らせた場合の方が、大阪正米を一ヶ月後らせた場合よりも、相關係數が常に大となつてゐる。之により大阪正米相場に先行性があり、鮮米相場は之に追隨することが瞭となる。(2)朝鮮に於ける朝鮮玄米及び粳相場間には、大阪正米と朝鮮玄米相場との間に於ける如き、密接なる關係が認められない。大邱に於ては玄米と粳相場との間には〇・五七七〇の關係があるのみであり、木浦に於ける兩者の間には稍高き〇・七六五九の關係がある。此の玄米及び粳相場の前後關係に就て見るに、木浦に於ては同月の相關係數よりも、粳相場を一ヶ月後らせた場合の方が瞭に大であるから、玄米相場の先行性が瞭である。大邱に於ては同月の係數が最大であるが、粳相場を一ヶ月後らせた場合の方が、玄米相場を一ヶ月後らせ

11) 相關係數測定方法は Mills, Statistical Methods. p. 388. による。12ヶ月移動平均としては、1月より12月迄の移動平均を6月と7月との中間に置き、次に2月より翌年1月迄の平均を7月と8月との中間に置き、此の兩移動平均値の平均をとつて7月の移動平均値とする方法によつた。

た場合よりも、係数が遙に大であるから玄米相場に先行性あることが疑はれない。(3)大阪正米相場と朝鮮粳相場との関係は、朝鮮玄米と粳相場との関係よりも更に薄い。此の場合に於ても大阪正米相場に先行性あることは瞭である。

右の諸關係よりして朝鮮玄米は大阪正米に追隨し、粳相場は玄米相場に追隨することが瞭となつた。大阪正米相場を太陽に譬ふれば、玄米相場は地球であり、粳相場は月である。月たる粳相場は地球たる玄米相場に牽引されつつ、太陽たる大阪正米相場に牽引される。反之朝鮮米の價格が其の費用價格によつて規定さるるならば、朝鮮農家の手離す粳相場に先行性あるべき筈である。其の然らざる所以は、内地に於ける需給の大部分は内地米であるから、之に入込む朝鮮米の價格、引いて朝鮮の米集散地に於ける米價格も、内地に於ける米價に引きつけられて、朝鮮に於ける費用價格より若干離脱するものではなからうか。¹²⁾これ桑葉の價格が其の生産費によつて規定されず、それは繭價格により、繭價格は更に生糸價格によつて決せらるる關係に若干似てゐる。

既述の如く鮮米は品質改良により、近時内地米との値鞘を大いに縮少せりといふも、尙ほ平均して鮮米の方が若干安價である。¹³⁾されば朝鮮農家にとりては、より高價なる内地米價に密接に追隨する玄米價格を以て、其の生産米を販賣する方が、遙に追隨關係の薄き粳價格を以てするよりも、有利である。然るに朝鮮農家から手離されるものが粳であることは、彼等にとつて甚だ不利益となる。且つ農家が直接粳を賣却することは、朝鮮に於ける一の特種加工業(通常米穀商の兼營にかゝる)の存在を必要ならしめ、粳と玄米との間の價格關係を稍もすれば中斷せしめる。¹⁴⁾此の

- 12) 鮮米が其の費用價格より離脱するにしても、それが果して眞の米生産者たる朝鮮農家の利益となるか否かは別個の問題である。
13) 大阪堂島米穀取引所に於ける昭和5年度の攝津中米の標準價格は26圓40錢であり、之と内地米39銘柄の平均格差は1圓32錢なるに、鮮米の12銘柄の平均格差は1圓45錢である。
14) 東浦庄治氏、鮮米の統制と朝鮮の農民(帝國農會報第19卷11號)16頁參照

ことは玄米價格と粳價格との關係が、大阪正米と玄米價格との關係より薄きことによつても立證される。

更に農民の粳販賣上に於ける不利なる立場は、朝鮮に於ける玄米相場と粳相場との季節的變動指數を比較することによつて、一層明白となる。之を立證するため大邱と木浦とに於ける玄米、粳兩相場につき、大正十年七月より昭和四年六月に至る九十六ヶ月につき、十二ヶ月の移動平均法に依て季節的變動指數を求める。

第七表 朝鮮玄米及び粳相場の季節的變動指數

月	大玄	邱米	大邱粳	木玄	浦米	木浦粳
1	95.8	95.0	96.7	96.8		
2	98.2	97.2	96.4	95.4		
3	95.8	99.0	97.2	102.7		
4	99.3	100.2	97.9	102.2		
5	97.5	100.4	97.5	103.0		
6	106.2	106.2	103.6	108.2		
7	107.1	113.3	105.9	107.0		
8	104.2	104.5	103.8	101.5		
9	104.4	101.4	102.4	99.4		
10	98.4	96.3	103.5	99.4		
11	98.1	95.8	98.0	93.2		
12	95.0	90.7	97.1	91.2		
平均	100.0	100.0	100.0	100.0		

右によれば玄米相場に於ても、收穫直後の十一月より四月頃迄が安價であるが、粳相場に至つては收穫直後の十一月、十二月が更に一層安く、三月以後漸騰する傾向を有する。朝鮮農家は粳を何月頃迄に賣却するかに就ては、統計の徴すべきものがない。

いが、内地に於ても農家（地主以外の）にあつては、十一月より翌年一月迄の三ヶ月間に商品米の約四四％が販賣される。貧弱なる朝鮮農家に於ては更に其の割合が大であり、恐らくは舊正月頃迄に殆んど全部賣却されるのではなからうか。これ小農はその折角收穫した粳を自家用に消費する

15) 實數の12ヶ月の移動平均を求め、移動平均値に對する各月の實數の比率を計算し、此の比率から毎1月、2月等々の Median を求め、此の1年の合計が1200となるやう換算する方法である。

こと僅にして、之を賣却して一旦現金に換へるか或は直ちに滿洲粟又は外米に換へざるを得ないからである。

第八表 鮮人一人當りの米及び粟消費量¹⁶⁾

年次	一人當り米消費量(石單位)	正消費量と大のをする100と指數	一人當り粟消費量(石單位)	正消費量と大のをする100と指數
大正 1	0.689	100	0.234	100
3	0.675	98	0.294	126
5	0.655	95	0.269	115
7	0.672	98	0.324	139
9	0.625	91	0.273	117
11	0.623	90	0.385	165
13	0.592	86	0.378	162
15	0.518	75	0.373	159
昭和 3	0.525	76	0.373	159
4	0.428	62	0.363	155

て、利益を占むる立場にあるものは果して何人であらうか。

四

朝鮮米と内地米とに就ては、數量及び價格の兩方面より其の關係を見たるが、今や進んで朝鮮の農業生産關係に立入つて考察せなければならぬ。一般に内地の米生産者は生産費低廉なる朝鮮産米のため、内地米價が下押しさるる不利を近年痛切に感じてゐるとされてゐる。内地と朝鮮との米生産費は如何なる關係にあるか。¹⁷⁾

若し朝鮮人にして内地人と同様の米の消費をなすならば、朝鮮に於ては米は過剰に生産されてゐるのではなく、寧ろ過少生産であり、生産の不足である。¹⁷⁾ 朝鮮人は價格の高い米を賣つて價格の安い粟を買ひ、これを消費する。彼等はいかに經濟人であることよ。しかし彼等は生産せる粃の販賣については、如何に非經濟人的行動をなしつつあることよ。粃相場の季節的變動を利用し

16) 鮮人1人當り米消費量は、朝鮮總督府殖産局、朝鮮の米(昭和5年3月) p. 49 による。鮮人1人當り粟消費量は朝鮮總督府、昭和4年度農業統計表、の第8表及び20表記載の各年の粟産額に粟輸入額を加へたる合計を朝鮮人口(内地人を含まず)を以て除したる商である。朝鮮人口は上掲朝鮮の米49頁の數字による。粃相場は大邱、木浦の如き米粃集散地の相場である。地方農家の庭先相場は若干更に之より低きものがあらう。

第九表 朝鮮及び内地の自作農の米生産費
(大正十五年度)

費目	内地	朝鮮
種子費	0.78	0.90
肥料費	15.92	6.63
諸材料費	1.47	—
勞賃	29.30	11.67
畜力費	2.87	—
農具費	2.48	2.00
農舍費	1.94	
公課	10.48	1.62
土地資本利子	28.11 (年4分)	13.27 (年8分)
小作料	—	—
合計	93.35	37.03
收穫量	石 2.553 (玄米)	石 3.00 (粃)

第十表 粃一石當り生産費
(大正十五年度)

道名	自作農の採算	小作農の採算
京畿	—	—
忠清北	9.57	10.12
忠清南	13.04	15.36
全羅北	10.88	10.19
全羅南	11.22	10.89
慶尙北	13.19	12.93
慶尙南	11.95	14.27
黃海	10.94	11.93
平安南	13.53	14.82
平安北	9.92	10.21
江原	9.18	11.00
咸鏡北	12.82	13.21
咸鏡南	7.11	6.60
平均	11.11	11.79

内地玄米一石當生産費 (約四〇圓(大正十一年乃至大正十三年平均)
約三四圓(大正十五年))

朝鮮玄米一石當生産費 (二六—二九圓(大正十二年)
二四—二六圓(大正十五年))

米價も鮮米の低廉なる生産費によりて決定さるるにあらざるか。此の點は價格理論よりするも興味ある問題であるが、今日に於ては之を數字的に解明するに足るだけ、生産費調査が完全ではな

- 17) 昭和4年末の朝鮮總人口は19,331,061人である。1人當り、1石1斗を消費するとせば21,264,167石を要す。昭和5年度の大豐作19,183,135石を以てするも、尙ほ2,081,032石の不足となる。三宅鹿之助氏、朝鮮と内地との經濟的關係(京城法學會論叢第1冊) p. 92 參照 矢内原忠雄氏、朝鮮産米増殖計畫に就て(農業經濟研究第2卷1號) p. 12 參照
- 18) 内地米產生費は帝國農會の大正15年度米生産費資料調査により、朝鮮は朝鮮總

第十一表 朝鮮に於ける耕地の自作及び小作別割合

年次	自作		小作	
	畓(内地の田)	田(内地の畑)	畓(内地の田)	田(内地の畑)
大正 5	34.42	53.96	65.58	46.04
13	35.27	57.52	64.73	42.48
14	35.06	57.51	64.94	42.49
15	34.92	57.30	65.08	42.70
昭和 2	37.35	53.32	62.65	46.68
3	34.43	52.40	65.57	47.60
大正13—昭和3年の5ヶ年平均	35.40	55.60	64.60	44.40

い。一方に於て内地米價は朝鮮米移入のため、内地の費用價格より幾分低下すると共に、他方内地に入込む鮮米價格は幾分朝鮮に於ける費用價格より離脱するものと考へられる。然かも此の關係は内地に於ける米の供給過多と過少とに従て、或は内地米價が朝鮮の米生産費に近づくこととなり、或は鮮米價格が内地米の生産費に近づくことともならう。朝鮮の米作の有利は、地價、勞賃、公課の低廉によるものであり、之等は尙長く内地米を壓迫する主要原因として持續するであらう。我々は進んで朝鮮の農業經營形態を検討せなければならぬ。先づ朝鮮に於ける全耕地を自作農地と小作農地とに分ちて比較しやう。¹⁹⁾

右に由れば最近五ヶ年平均にて、田(内地の畑)の四四・四%、畓(内地の田)の六四・六%が小作に附せられてゐる。而して朝鮮産米は全部畓にて栽培され、地主、小作人間に於ける收穫の分配は平均して折半さるるものとし、且つ自作地に於ける生産力が同一なりとすれば、各階級への産米の分配は、大正十三年乃至昭和三年の平均に於て左の如くなる。

督府、調査資料第26輯、朝鮮の小作慣習(昭和4年3月) p. 43—53. による。
 朝鮮玄米1石當り生産費(大正12年度)は東畑精一氏の算出による。同氏農業恐慌の基本經過(矢作教授還曆祝賀記念、農業政策の諸問題) p. 435。
 大正15年度の朝鮮玄米1石當り生産費は、玄米1石は粳2石と見て、第10表の自作小作の平均粳生産費11.45圓を2倍して、それに玄米調製費1.70圓(那須博士、日本農業論 p. 284 による)を加へたる24.60圓と計上する。

第十二表

米 産 額	一五、一五三、三三二 ^石
自 作 農	五、三六四、二八〇 ^石
小 作 農	九、七八九、〇五二
内、地主の取得分	四、八九四、五二六

此の産米の幾割が商品化さるかを更に推計する。²⁰⁾

第十三表 商品化さるゝ米量
(大正十三年昭和三年の五ヶ年平均)

農業人口	内地人 41,256人 鮮 人 14,696,653
農家の米消費量	内地人 49,507 ^石 鮮 人 7,803,922
商品化さるゝ米量	7,299,903
米 産 額	15,153,332
商品米量の米産額に對する割合	48.2%

此の推計によれば、産米の四八%が商品化される。内地米の商品化の程度に比して略均しきことを知る。²¹⁾然らば此の商品化さるる米量中、地主の占むる部分は幾割に當るか。²²⁾

第十四表 産米の分配と販賣高(大正十三年昭和三年五ヶ年平均)

地域別	種 別	産米の分配		販 賣 高		分配高に對する販賣高の割合
		實 數	百分比	實 數	百分比	
朝	小 作 米	4,894,526 ^石	32.3%	4,226,770 ^石	57.9%	86.4%
	小作米以外	10,258,806	67.7	3,073,133	42.1	30.0
	合計(産米高)	15,153,332	100.0	7,299,903	100.0	48.2
内	小 作 米	15,207,000	25.4	12,409,000	37.9	81.6
	小作米以外	44,597,000	74.6	20,304,000	62.1	45.5
	合計(産米高)	59,804,000	100.0	32,713,000	100.0	54.7

19) 朝鮮總督府. 農業事情 p. 26, 27. 西澤基一氏, 朝鮮米に關する一つの考察(經濟時報, 第3卷. 1. 2號)同氏, 米穀問題の(本質と米穀法大日本米穀會第二十五週年記念論文集) 參照

20) 農業人口は昭和4年度, 朝鮮總督府統計要覽. 25 p. による. 1人當り米消費量は前掲朝鮮の米 p. 49 による.

21) 拙稿, 産米の管外移出高の季節的變動(本誌第33卷2號參照)

第十五表 内鮮農家戸数百分比

年次	地主		自作		自兼小作		小作		純火田民
	内地	朝鮮	内地	朝鮮	内地	朝鮮	内地	朝鮮	
大正 5	14.5%	2.5%	26.6%	20.1%	35.0%	40.6%	23.9%	36.8%	—
9	14.5	3.3	26.2	19.5	35.0	37.4	24.3	39.8	—
14	14.7	3.8	26.5	19.9	35.3	33.2	23.5	43.1	—
昭和 2	14.5	3.8	26.7	18.7	35.8	32.7	23.0	43.8	1.0
3	—	3.7	—	18.3	—	32.0	—	44.9	1.1

右表によれば産米一千五百萬石中、地主の取得分は三二%を占め、商品米量七百三十萬石中、地主の取得分は五七%を占むることとなる。之を内地に比すれば地主の取得分は甚だしく過大とな

つてゐる。かかる多くの取得米を得て之を販賣する朝鮮の地主戸数は、果して總農家戸数の幾割を占むるか。²³⁾

之によれば地主戸数は總農家戸数の僅に四%以下である。之によつて農業所得分配の如何に不平等なるかを痛感するのであつて、内地に比して一層甚だしいものがある。加之朝鮮に於ては地主戸主は逐年増加しつつあり、自作農及び自小作農は逐年減少し、小作農が逐年著しく増加しつつある。

土地所有分配に就ては第十一表に之を示したるが、畚に就て云へば其の總反別の六五%は小作地にして、然かも此の小作地を所有する地主戸数は總農家戸数の三・七四%なるを知るならば何人も一驚を喫するであらう。此の事情は朝鮮農業の寶庫たる南部に於て更に甚だしい。²⁴⁾

土地所有分配に就ては第十一表に之を示したるが、畚に就て云へば其の總反別の六五%は小作地にして、然かも此の小作地を所有する地主戸数は總農家戸数の三・七四%なるを知るならば何人も一驚を喫するであらう。此の事情は朝鮮農業の寶庫たる南部に於て更に甚だしい。²⁴⁾

南部	忠清		地主		自作		自兼小作		小作		純火田民	
	全羅	慶尙	自作畚	小作畚	自作	自兼小作	小作	純火田民	自作	小作	自作	小作
	三・七三	六・六	二・三	一四・〇五	三・六	四・九	〇・二五					

22) 内地の販賣及び分配高は昭和6年度。米穀要覽 p. 24 による。朝鮮に就ては小作米は第12表より、商品米は第13表よりとる。小作米中の商品米量を算出するには、前掲朝鮮農業事情(p. 25)の地主戸数 104,012戸に朝鮮農家平均家族数 5.35人(同書2頁及び昭和4年度朝鮮總督府統計要覽p. 25より算出)を乗じ、更に1人當り消費量として1.20石を乗じて地主の自家用米を算出して、之を小作米より差引きて求めた。之を商品化さるべき米量より減じたるものを以て。小作米以外

第十六表 小作農一戸當りの收支狀況

	大	中	小	細
収入	824 ^円	591 ^円	333 ^円	215 ^円
支出	808	596	353	227
餘 剩	16	△ 5	△ 20	△ 12

即ち總農家戸數の二・三二%を占むるに過ぎない地主が、畝面積の六六・三%を所有してゐる。しかも『朝鮮に於ける大中地主は多くは京城又は地方の郡邑に居住し、其の所有地の管理の如きは悉く之を舍音(差配人)に委して顧みず、……從て地主の土地に對する愛念の薄きは勿論小作人に對する温情の如き容易に認むべくもあらず。』²⁵⁾かくして土地兼併の傾向は累年増大の傾向を呈し自作農は没落して小作農になりゆく、而して累年増加しつつある小作農は其の家計に就ても決して榮ある將來を示してゐない。²⁶⁾小作農に於ても、その農業經營の經濟的存在の最低があり、農民經濟はそれ以下では收支償はざる事情にある場合、換言すればそれ以下では農民經濟が損失となるか或は不可能となる場合に、彼等の立場は果して何れの階級に歸屬するであらうか。²⁷⁾論者或はチャヤノフの特殊なる心理的打算よりして、朝鮮小農の強靱性を説明するかも知れぬ。しかし言ふものをして言はしめよ。我々は更に朝鮮に於ける内地資本の進出を土地所有に就て見やう。之には充分なる資料がないが、左の地租納稅義務者面積人員により其の大勢が窺はれる。²⁷⁾

鮮人を越え、しかも前者が年々増加しつつあるに反し、後者は減少の傾向を示す。五十町歩以上の所有者に於ても、内地人の増加率は朝鮮人を遙に凌いでゐる。内地資本の進出が瞭に現はれて

の販賣米とした。地主の1人當り消費量として1.20石をとりたるは、一般鮮人の消費量より多いと考へらるゝからである。

23) 朝鮮は前掲朝鮮農業事情 p. 25 より、内地は第五次農林省統計表 p. 8. 第一次農林省統計表 p. 2, 本邦農業要覽(昭和4年度) p. 33 より算出す。

24) 前掲、朝鮮農業事情 p. 28, 29.

25) 同書 p. 30.

第十八表 内地人畜所有者
(昭和四年七月現在)

所 有 者	所有面積
東洋拓殖會社	37,892 ^{町歩}
不二興業株式會社	4,340
不二農業株式會社	4,127
鮮滿開拓株式會社	3,881
朝鮮興業株式會社	3,744
朝鮮實業株式會社	3,215
東山農事株式會社	2,931
熊本農場	2,750
多木農場	2,455
加藤農場	2,289
右近商事會社	2,013
計	69,637

米穀を通じて見たる朝鮮と内地との關係

第三十三卷 三八九 第三號 七三

註、本表は前掲の朝鮮の農業一六七頁以下より算出する。東洋拓殖會社の所有面積は同社の第二期營業報告書による。

第十七表 地稅納稅義務者面積別人員數

年 次	大正10	13	昭和 2
百町歩以上	内地人 490 鮮 人 426	521 356	553 335
五十町歩以上百町歩未滿	内地人 519 鮮 人 1,650	614 1,507	683 1,617
二十町歩以上五十町歩未滿	内地人 1,420 鮮 人 14,438	1,976 13,601	2,335 15,346
五町歩以上二十町歩未滿	内地人 4,099 鮮 人 140,974	5,859 146,538	6,857 150,187
一町以上五町歩未滿	内地人 11,551 鮮 人 968,116	15,847 1,000,962	18,767 1,024,771
計	内地人 18,079 鮮 人 1,125,604	24,817 1,162,964	29,195 1,192,256

る。しかも内地人の耕地所有者に就ても土地所有集中の傾向が顯著である。今主なる内地人の畜所有者を挙げれば上の如くである。^{*}然らばかかる内地人の所有地漸増傾向にとつて、何が最も決定的なる力となつてゐるか。それは云ふまでもなく内地人の手中にある資力の力である。然らば此の資本は何故に朝鮮の土地獲得に向つて進出するか。吾々は朝鮮農地の収益關係に此の原因を見出さなければならぬ。

かかる収益計算の基礎となる一般朝鮮の小作料は如何であるか。²⁶⁾ 朝鮮の収收穫量に對する小作料は、平均四割七分七厘から四割九分九厘に及んでゐる。更に此の外に小作人は

前掲朝鮮の小作慣習 p. 38.
26) 四方博氏、市場を通じて見たる朝鮮の經濟(京城帝國大學法文學會、朝鮮經濟の研究) p. 265.
27) 津田藏之丞氏、朝鮮に於ける小作問題の發展過程(同書) p. 425. 朝倉昇氏、朝鮮農民運動の展開(農業經濟研究第3卷4號) p. 117 參照
(註) 1箇年間の農家の轉業者總數は1ヶ年に15萬人に及び、その内6萬9千人は勞働其

穀收穫量に對する畚小作料の割合(大正十五年)

	大	中	小	細
朝鮮十三道平均	〇・四八六	〇・四八八	〇・四九九	〇・四七七

小作地に對して各種の負擔を蒙てゐる。例へば、地租諸公課、用水料及び水利組合費等の全部一部、種子、金肥代、土地工事及び修繕費の全部又は一部、其他舍音の報酬、檢見の手數料、地主舍音、秋收員の饗應接待費等々、雜費負擔の大なること驚くべきものがあり、『大多數の地主、舍音の小作人に對する態度は、横暴跋扈といふべきか、苛斂誅求と稱すべきか、何にしても小作人の負擔の苦痛は察するに餘りがある。』²⁷⁾加之『農家戸數に對し耕地面積の割合少く、耕作希望者の多い南鮮地方に在りては、小作契約の改定毎に、年々小作料が高率となり行く傾向がある。』²⁸⁾かくして朝鮮小作人は、米の生産費又は供給價格の中に於て五〇%の地代を負擔せねばならず、しかも此の五〇%の地代負擔より解放せられんが爲めに、假令米生産に關する集約的有機技術の發達を圖るにしても、小作契約の改定毎に、皮肉にも地代負擔割合は、五三%になり、五五%にもなりゆく。かくして小作人は『縱令傳統の自暴自棄と懶惰性の爲めに、晨に星を戴いて出で、夕に月を踏んで歸るほどの勤勞をしないまでも、一年の間を土に親みて、得る所の收入の寡薄なること丈けは、何としても否定出來ない事實である。』²⁹⁾かくして一方に於ける小作人の收入の寡薄は他方地價の低安と俟つて、地主計算による畚利廻を多からしめる。³⁰⁾

他の傭人となるといふ(朝鮮小作慣習 p. 38.)

27) 前掲、朝鮮の小作慣習 p. 11 より算出す。
* 此等11人の土地所有者の所有地合計は6萬9千町歩にして、内地人の總所有面積14萬5千町歩の48%に當る。何といふ土地所有の兼併であらう。

28) 前掲、朝鮮の小作慣習 p. 220.

29) 同書 p. 230

内地に於ける田賃
貸収益利廻

上田	割 0.0536
普通田	0.0572
下田	0.0642

朝鮮に於ける畜賃
貸収益利廻
中等畜

南鮮	割 0.81
中鮮	0.88
西鮮	0.80
北鮮	0.95
平均	0.84

朝鮮の地主はその耕地を總て小作に附する。而して小作による米作經營そのものは、内地より粗放であり、そこには科學的大經營は存してゐない。かくして土地兼併の結果は、地主の販賣米を愈々増大せしめる。而して朝鮮産米の近年に於ける品質改良と相俟て、品質の統一されたる米が大地主によつて大量的に纏められて、内地米穀市場へと殺倒する。然るに内地米の品質は各府縣に於て尙ほ區々であり、全國的に統一されず、地主、小作人の販賣米は朝鮮米に比して、分散的である。かくして朝鮮米による内地米の壓迫といふ事實が現はれ來たるものである。

五

以上に亘て内地と朝鮮との關係を米穀を通じて、然かも數量、價格、生産關係の諸方面より考察して來た。而して鮮米による内地米壓迫の眞の原因が何邊に存するかを瞭にした。内地人口が尙ほ此の勢を以て増殖して行く限り、大勢より見て、朝鮮米の移入は將來に於て尙ほ必要であり又其の増殖を圖ることも必要であらう。此の意味に於て、朝鮮に於ける産米増殖計畫そのものに對しては、何等批難すべきではなからう。本來は人類愛に立脚せる植民政策であつた。然るに拘

かかる事情の下に於ては、若し農業投資家なるものあらば、何を苦しんで不利且つ將來性に乏しい内地の農業に投資する者があらうか。朝鮮へ驥足を伸ばすことは自然の勢である。併し乍ら

- 30) 同書 p. 214. 朝鮮の小作慣習については、朝鮮農會、朝鮮の小作慣行 (時代と慣行, 昭和5年9月) 参照
31) 同書, p. 220.
32) 内地は大正14年8月, 日本勸業銀行第4回全國田畑賣買價格及収益調 p. 24. 朝鮮は昭和6年3月朝鮮殖産銀行, 第3回全鮮畜田賣買價格及収益調 p. 12.

らず、兎角世人の期待を裏切りし所以のものは、眞の米生産者たる農民の利益が生産、交易及び分配過程を通じて、稍もすれば犠牲に供せられたからである。朝鮮小作農の向上は之を内地に於ける如き自作農創定事業に俟つことは、餘りに迂遠である。寧ろ健實なる小作法の制定こそ緊急の必要があらう。小作契約諸條件の改善により、彼等の生活を安定せしめ、土に親しましむることは、やがて朝鮮の農業を集約化し、産米の増殖を圖る上に於て、大なる効果を齎すであらう。されど鮮米の移入統制は何としても必要である。今や必然的に問題となる朝鮮に於ける農業倉庫の普及、鮮米の月別平均移入、移入管理、專賣等々、何れの政策を採るにしても、朝鮮農民の眞の利益を充分考慮する所がなくてはならない。